



T1A3

22

(H55k)

明治二十七年十二月十二日
高橋小學校修身新定用

伯爵副島種臣 閱
伯爵東久世通禧 著

校訂
高等小學修身書

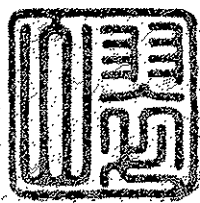
東京

國光社

祖宗之
遺訓

明治二十五年九月

二位勲等近衛忠熈



高等小學修身書卷之三

東久世通禧 著

副島種臣 閱

第一 皇祖の遺訓

第一課

皇祖、國を肇めさせ給ひて、これを、皇孫につ
たへさせ給ひし時、勅して、葦原の千五百秋の
瑞穂の國は、我が子孫の皇たるべき地なり。爾
皇孫、ゆきて知らせ。寶祚のさかえまさむこ
と、天壤とともに、さはまりなかるべしと宣は

して、此の大八洲の君父とさだめさせ給へり。その時、また、いとも尊き三種の神器をさづけさせ給ひて、これを、天位の信とし御手に、ろの寶鏡をとらせ給ひて、吾が兒、この寶鏡を視ること、われを視るが如くせよとのかしこき神教をも垂れさせ給ひき、代々の皇上、神器ととともに、寶祚を承けつがせ給ひ、この尊き神勅に則り、ますく、皇基を伸張し、萬民を愛撫せさせ給ひて、ひたすらに、皇祖の大御意にかなはせられむことをつとめさせ給へり。これ、即、報本反始の御教にて、忠孝の道のもと

つくところなり。忠孝の道は、我が臣民百行のもとにて、また、大日本國の大本たるものなり。

第二課

源親房は、世の亂をなげき、神皇正統記をあらはして、皇統の由來を論じ、皇祖の、三種の神器を、皇孫にさづけさせ給ひし深意を述べたり。其の畧に曰はく、鏡の如く、分明なるをもちて、天下に照臨し給へ。八坂瓊のひろがれるが如く、曲妙なるを以て、天下をまろしめせ。神劔を提げて、まつろはぬものを平げ給へと勅りましく、けるどろ。この國の神靈として、

皇統一種、正しくましますこと、まことに、これ等の勅に見たり。この三種につきたる 神勅は、まさしく、國をたもちますべき道なるべし。鏡は、一物をたくはへず、私の心なくして、萬象をてらすに、是非善惡のすがた、あらはれずといふことなし。玉は、柔和善順を徳とす。劍は、剛利決斷を徳とす。神勅明にして、詞つゞまやかに、旨ひろし。あまつさへ、神器にあらはし給へり。いと忝きことにや。中にも、鏡を本とし、宗廟の正體とあふがれ給ふ。鏡は、明を形とせり。心性明なれば、慈悲決斷は、其の中にあり。ま

た、正しく、御かげをうつし給ひしかば、ふかき御心を留めたまひけむかし。君も、臣も、神明の光胤をうけ、或は、まさしく、勅をうけたまひし神達の苗裔なり。誰か、これをあふぎ奉らざるべき。

第二 忠孝

第三課

天皇は、皇祖の神胤にましく、て、神器をうけつたへさせ給ひ、皇祖の遺體にましく、て、臣民に、君臨せさせ給ふ。臣民も、開闢のはじめより、皇祖、皇孫に仕へ奉れる群臣の後

裔、または、歴朝の遺胤にあらざるはなし。かくの如く、君も、臣も、たなじく、天神の血胤をうけしものにて、皇室と、臣民とのあひだは、宗家と、支家との如く、また、父と、子との如きものなり。されば、君臣の情と、父子の親と、全く、一義にして、忠と、孝と、一途なるべからず。其の父祖に事へて孝なるは、即、君に忠なるなり。君に事へて忠なるは、即、父祖に孝なるなり。これ、我が國特殊の大道にして、異邦には、其の例あらざるどころなり。

劔太刀いよゝとぐべしいにしへゆ

さやけくたひて來にし其の名ぞ 萬葉集
第四課

道臣命は、初の名を、日臣命といへり。皇孫降臨の時、從ひて、まもり奉りし天押日命の後なり。神武天皇御東征の時、皇軍にあたがひ奉りて、紀伊の熊野にいたりしに、山路けはしくて、皇軍すゝむこと能はず。たましく八咫鳥のみちびきによりて、日臣命、大來目の兵をひきゐる、山谷をたどり、路をひらきて、遂に、菟田の下縣に達することを得たりしかば、天皇、其の忠勇を賞し給ひて、名を、道臣命と賜へり。それ



旅路にいで、立ち、はるぐ、山をこに、海をわた
り、数々の艱難辛苦をへて、やうやく、佐渡につ
き、父に見はむことを請ひぬ、山城、阿若の孝心
に感ずれども、鎌倉に聞はむことを恐れて、こ
れをゆるさず。既にして、資朝は、害にあひ、一僧、
其の屍を收め、火葬して、骨を、阿若にれくれり。
阿若、大になげさかなしみしも、せん方なけれ
は、僕にもたらせて、高野山に葬らしむ、さて、己
は、留りて、自殺せむとせしが、又思へらく、君あ
り。仕へざるべからず。母あり。養はざるべから
ず。父の志はつがざるべからず。徒に死ぬるも、

さらに益なし。むしろ、生きて、志を遂げ、忠孝を、
兩ながら全うするに如かずと。夜、竹をよぢ、隍
をわたりて、のがれ出で、晝寝ね、夜行きしに、追
ふもの、呼びもとむること、きびしかりしが、た
またま、人に救はれ、船にのることを得て、つひ
に、京師にかへりぬ、かくて、高時は、誅に伏し、阿
若、左兵衛權佐となり、專、忠勤をはげめり、その
後、後村上天皇の御時、勅をうけたまはりて、
鎮西にいたり、賊を撃ち、また、中納言隆俊等と、
足利義詮を討ちて、これに克ちぬ。

第三 國の典禮

第六課

國の典禮とは、大祭、祝日をはじめ、すべて、公に
行はる、祭典儀式をいふ。我が 朝廷に於い
て、行はせらる、祭典儀式は、みな、古より、ふか
きいはれありて、世々つたはり來り、この尊き
國體と、終始、相はなるべからざるものなり、さ
れば、歴代の 皇上、御自、あつく、これをとり行
はせ給ひしなり、祭典を重むじて、祖神に、敬を
いたし、儀式をつゝしみて、禮を正しくするは、
みな、其の本にむくい、始にかへる義なり。
先、神祇を祭鎮して、あかる後に、政事を議すべ

し。蘇我倉山田石川麻呂

第七課

世には、國の典禮を重むせずして、虚飾の如く思ひなすものなきにあらず。是、大なるあやまりなり、古歌にも、天つ神、國つ社を、いはひてず、わが葦原の、國はをさまる。とあるが如く、我が國の盛衰は、實に典禮のなはるど、るなはらざるこによることなり。もし、典禮するゝときは、斯道明ならずして、人心れのづから、腐敗し元氣も、つひに、消磨するに至らむ。故に、臣民たるものは、つねに、此の典禮を重むじ

て、かりるめにも、れろるかに思ふべからず。

徳川光圀は、尊皇の志ふかく、大日本史を著して、大義名分を明にせり。また、朝廷にて行はせらるべき典禮の、すたれたる事多きをなげきて、安藤爲實といふ人を、總裁とし、四方拜より追儼^{ツキナ}にいたる年中の公事、れよび、踐祚、大嘗會より、國忌、薨葬にいたる臨時の御儀式など、古例を考へて、之をあつめ録せしめ、すべて、五百十三卷の書となしたり、成るにれよび、内大臣今出川公規によりて、之を、靈元上皇に獻りければ、叡感な、めならず、禮儀類典とい

ふ題號を賜はせられたり。

第四 貞淑

第八課

女子は、靜淑溫順なるを旨とす。父母の膝下にありては、孝養怠ることなく、一たび、他人の家に嫁ぎては、よく、其の舅姑に事へ、夫に順ひて、終身、他を思ふことなかるべし。よく、家内ををさめて、夫に、内顧の憂なからしめ、子孫を教育して、忠良なる人とならしめむこと、これ、重なるつとめなり。また、事變にあふことあるも、其の守る所をうしなはざるを、貞淑といひて、婦

徳の、最、大なるものとす。

わがせこは物を思ひる事しあらば

火にも水にもわれなけなくに 萬葉集

第九課

昔、上杉家の家臣黒井四郎左衛門の女に、あげのといふものあり、同藩の士に嫁ぎけるが、不幸にして、夫、はやく死にければ、自家事をさめ、一子信藏といふ兒をうだて、七歳の時より、近隣の粕屋某につき、四書の句讀をうけしめぬ。然れども、あげのは、もと、貧しき家にうまれて、教育を受けしことなければ、信藏が、かへ

りて、復讀する時、誤あるも、訂すことあたはず。忘れし所あるも、教ふるに由なかりき。こゝに於いて、つひに、奮發して、信藏の業をうくる毎に、粕屋の窓の下にたち、假字を以て、其の聽きたるまゝを記し、信藏の復習する時に、校正して、他日の用にするなへたり。かくの如くすること、二年にして、終に、四書全部を寫しをへぬ。後、信藏の書の書に題して、國字四書と記し、ふかく、之を秘藏せりとぞ。あげのは、かくの如く、心を用ゐて、教育したりければ、信藏は、遂に、藩にあげ用ゐられて、後に、少參事にいたれり。あ

けの、二十歳の時より、はやく、寡居せしも、終始、よく、貞操をまもり、嘉永六年、五十歳を以て歿したり。

第十課

細川忠興の夫人は、明智光秀の女なり。光秀、弑逆の行ありしかば、忠興、夫人をしりぞけて、三戸野の山中にねき、人をして、これを守らしめたり。既にして、光秀は、山崎にたふれ、從卒も、大方、討死しければ、侍臣等、夫人に、自殺をすゝめけるに、夫人答へて、われ、今、自殺せば、わが身の潔きは、人も知りなむ。されど、良人の命なきに、



いたづらに、身を害するは、貞操といふべからずとて、聞き入れざりき。かくて、艱苦を忍びて、ひさしき間をへたりしが、豊臣秀吉、これを聞きて、忠興をさとし、夫人を呼びかへさしめたり。其の後、石田三成、豊臣秀頼にすゝめて、徳川家康と、亂をかまふるに及び、忠興は、徳川につきて、關東にありければ、三成、夫人を奪ひとりて、質とせむとし、人をして、城中に迎へしめけるに、夫人は、家臣に向ひていふやう、われ、豊臣氏に背くべき理なし、さりとて、わが良人は、今、東軍にあれば、これに背くは、貞操にあらず。か

つ、三成の言にあたがふ時は、或は、たもはざる恥辱を蒙りて、良人の名をも汚すに至らむ。されは、今ころは、吾が自殺すべき時なれ、たとひ、三成の軍、攻めきたるども、必、これに向ひて、弓をひくこと勿れ、これ、豊臣氏に背かざるを證するなりと。また、使をはせて、忠興に報じ、妾死ぬども、三成の爲にはづかしめられず、決して、心を勞し給ふことなかれといひやり、門を鎖ぢ、家臣をいましめ、まづ、十歳の男子と、八歳の女子とを刺し、その身も、及に伏して卒りたりとす。

第五 師弟

第十一課

人の弟子となり、師に仕へては、我が位たかしといへども、高ぶらず、師をたふとび敬ひて、重むずべし。師を尊はざれば、學問の道たゝず。師たる人、教を、弟子にほどこさば、弟子、之にのつとり習ひ、師に對して、心も、顔色もやはらかに、敬ひつゝし、我が心をむなくして、自慢なく、既に知れる事をも、知らざる如くして、下るべし。師より受けたる教をば、心をつくして、極め習ふべし、これ、弟子たるものゝ、師にあひて、

教を受くる法りり。童子訓

第十二課

増田鶴樓は、藥を賣るを以て、業とせり。わかき頃、新井白石を師とし、詩を賦することを學べり。白石は、もと、經世の學に志し、詩文を以て、人に教ふることを欲せざりしかば、其の門に入るものはなほだ寡かりき、然るに、ひとり、鶴樓は、詩をよくするを以て、白石に愛せられ、其名も、おのづから、世に聞はければ、文墨の士の、之を訪ふものも多くなれり。故に、鶴樓は、常に、師恩をれもふこと、甚あつく、談、たま〜、學事

におよぶ時は、必、白石を賛稱してれかず。吾、匹夫にして、陋巷にありといへども、幸に、かくの如く、公子、長者に眷顧せらるゝは、豈、自身の力ならむや。これ、皆、白石先生の餘恩なりとて、感涙を催せり。されば、白石歿せし後にいたりては、談話の中に、たゞ、白石といふ名を聞きても、必、涙をうかべ、悲の狀をあらはしゝにぞ、人、皆、つとめて、白石に關することは言はざりし。はじめ、白石、なほ、世にありし時、毎年八月十五夜、鶴樓の家に會して、觀月をなしゝかば、白石歿後は、その時いたり、近隣の歡聲をきく毎に、

等ノ...
愁傷に堪へず、私に、其の日を以て、終身の心喪とせり。又、その忌日には、必、他に出でず、客を招かず、終日いたく、哀悼せりとす。

第六 博愛

第十三課

人、もし、富貴にして、たからを、多く貯へもたば、是、天より、我一人に、あつく賜ふにあらず、たほく、人を救はしめんために、われに授け給ふとたもひて、天命にふたがひて、常に、仁愛の心をもちて、貧苦なる人を恵み、飢饉する者を救ひて、善を行ふを以て、樂とすべし。是、天の御心に

背かざるなり。かくの如くならば、富貴なる甲斐ありて、大なる樂なるべし。家道訓

富貴の人は、其の力にあたがひて、ひろく、人を恵み助くべし。人生の樂は、人の苦を救ひて、人を樂ましむることにあり。貧窮にして、人を助くる力なくとも、善をする志だにあらば、其の功あるべし。人に、善をすゝめ、惡をやめさせ、人の害をのぞき、人の心をやはらぐるは、必、財を用ゐずとも行はる。もし、餘財あらば、無用の費をせずして、人の艱難を救ふべし。財ををしむべからず。初學訓

第十四課

高島玄俊は、近江國高島郡の人なるが、京に上りて、醫を學び、其の後、豊後國府内に下りて、開業せり。玄俊、性、質朴にして、廉直なり、つねに、節儉をたこなひて、冗費をはぶき、人に交るに、信義を專とせり。家富めりといふにはあらねども、便なきものをあはれみ、貧者には、物を惠み、病者には、藥をほどこすなど、その善行、甚多かりき、明治二年の凶荒に、米價たかく、庶民餓ゑむとせしかば、己の居宅を、質に入れ、金を借りて、窮民を救はむとし、中尾喜兵衛といふもの

に相談しけるに、喜兵衛、いたく、其の志に感じ、己も、玄俊に、力をそへ、同志のものをすゝめて、金五千兩を募り、之を以て、米をあがなひ、市中、近郷の貧民に施せり、また、その翌年、府内寺町より、火をいだし、延焼、百餘戸にたよびぬ。此の處は、貧民のみ住める町にて、ことに、凶荒の後なれば、營作のたてもなく、皆、やけあとに露宿して、寒暑に苦むをあはれみ、また、同志の人々とはかりて、金貳千五百兩を集め、之を基本として、これまでは、藁屋なりしを、瓦葺に改め、百戸ばかり建てつらねて、類焼の貧民に與ふ

るにいたれり、これ、全く、玄俊が仁心の實効あらはれたるなりと、人、みな、感じあへりとする。

第十五課

桑原平七は、豊後の人なり。性質溫厚にして、よく、儉約をまもり、常に、家業に勉勵せしかば、いよいよ、富みさかじけり。平七、仁愛の心、いとおふかく、困窮のものを救ふを以て、此の上なき樂とし、年ごとの剩餘金は、自分給金となづけて、或は、三十兩、或は、五十兩づつ、毎年、引きのけられ、これを基本として、ひたすら、窮民を救助せり。また、遊惰にして、貧しくなれるものをば、懇

にさとして、資金を貸しあたへ、本業につかして、貧家をたこし、類、甚多し、中には、心得違のものありて、借りたる金をば、むなしく費し、もとよりも、貧しくなれるものなきにあらねど、予は、己が教の行きどゝかぬ故なりと、我が身を責めて、其のものをどがめず、尙、一志ほ、力を入れて、導きさとし、かば、其の恩をあたひ、其の徳になつけるもの、いと多かりきとぞ、あはれまんと思ふ心はひろけれど

はぐ、む袖の狭くもあるかな道榮歌合

第七 謹慎

第十六課

人は、起ちふるまふべき様にて、品の程も、心の底も、見ゆるものなれば、人目をきどころにて、も、垣壁を、目と心得て、うちとくまじきなり。まして、人中の作法は、一足にても、あだにふまず、一詞といへども、心あさやど、人に思はるべからず。竹馬抄

なすわざにたのが心はかくれぬを

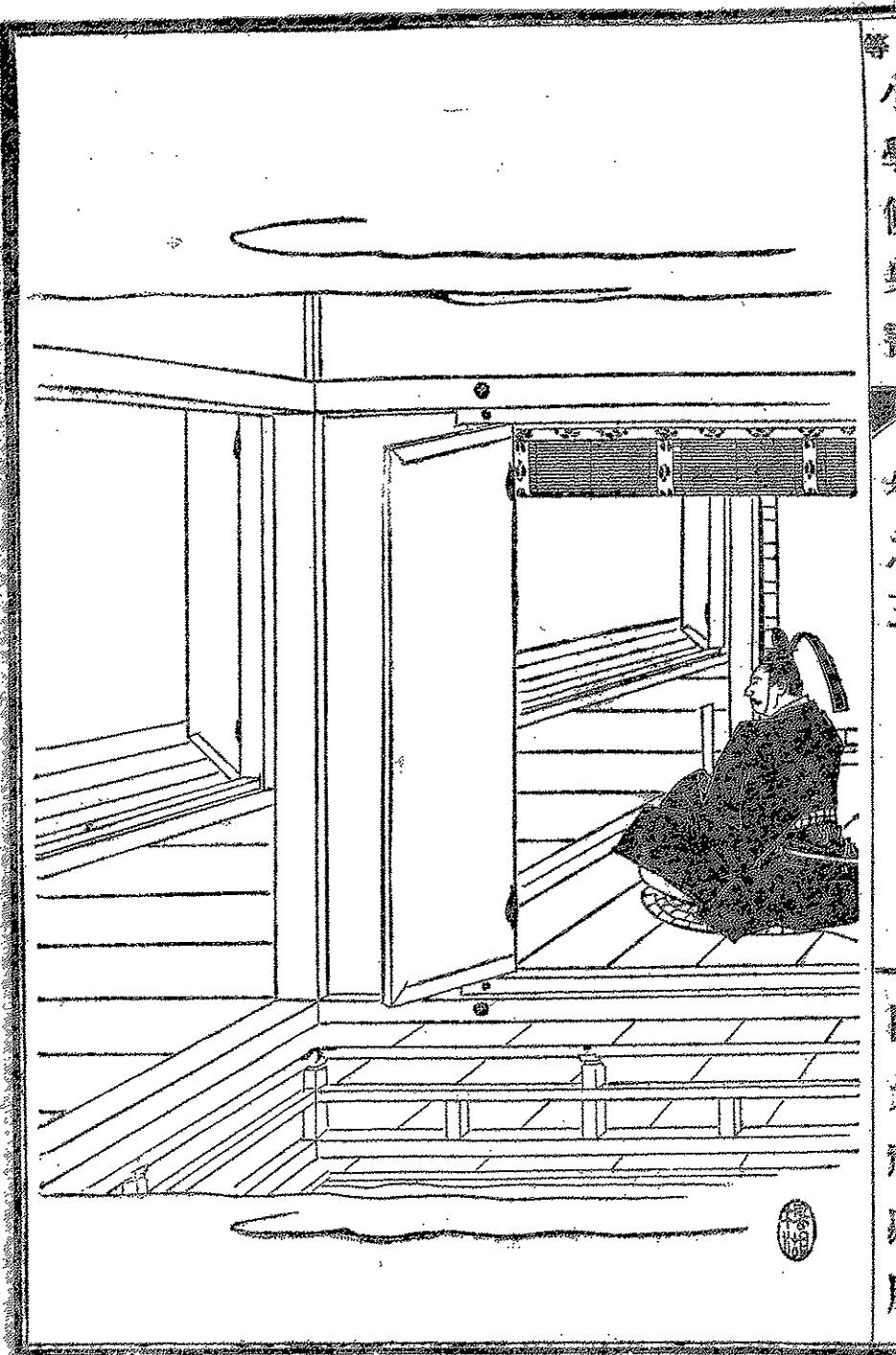
人はあらじとたもひけるかな六帖詠草

人の、我に接するに、曲を以てするも、我は、直を以て應ずべし。人の美事は、人にかたるべし。上

に達すべし、人の過失は、人にかたるべからず、上に達すべからず。告志篇

第十七課

徳川秀忠は、謹慎にして、平素、一言一行といへども、いやしくもすることなかりき。其の女は、東福門院と稱し、後水尾天皇の中宮となれり。かゝりしかば、朝廷にては、ことに、秀忠を優遇せられたれども、秀忠は、すこしも、驕慢の心を生ぜず、参内して、便室に休息せるときといへども、たいて、情容あることなし。嘗て、病にかゝり、數十日の間、病床にありしが、一日も、耳



の頭髮を梳らざることなく、且、人にかたりけるは、たとひ、吾、病ありとも、天下の政事は、つゝしみて聞かざるべからずといへり。其の、一たび、法令をいだすときは、率先して、之を遵奉し、曾て、みづから違ふことなく、以て、下を正せり。近郊にいで、鷹狩するごとに、其の時刻いたるときは、膳に臨むも、直に、箸を置き、起ちけり。また、他にいでむとして、すでに、其の準備を命ぜし後、事ありて、之をやむることあるときは、みづから臨みて、これをやめしめき。嘗て、侍臣に向ひて、世人、やゝもすれば、浮世は、夢の如

く、甚、短きものなれば、其の時に樂まざるべきは、終に、樂むべき時なしといへど、これ、大なる誤なり。夢の如く短き故に、ますく、よく勉むべきなりと語りきとす。

第十八課

萬の道、過も、災も、みな、慎なきよりれこる。慎めば、心に怠なく、身のわざに、誤すくなし。慎の一字、もとも、大切のことなり。具原益軒

本莊宗資は、もと、京師の人。將軍綱吉の時、召されて、大名の列にいりぬ。性、謹慎にして、ふかく、盈滿を戒とし、常に、五十錢を、坐右にかけ、かた

はらに、三扇函と書けり。ある人、其の故を問ひしに、答へて曰はく、吾、むかし、京師にありし頃、はなはだ貧しく、關東に下る時、留別のため、扇三柄を要することありしも、囊中、わづかに、五十錢を有するのみにて、購ふこと能はず、幸に、市人の好意によりて、やうやく、意を達するを得たり、いま、顯榮を極むれども、いかでか、其の昔を忘るべき。故に、これを掲げて、自いましむるなりと。

第八 禮讓

第十九課

人は、座作進退の間に、あはらくも、禮讓を忘るべからず。禮讓とは、人とまじはり、事に處するに、恭敬謙遜を主とすることなり。人に、禮讓の心なきときは、慾を恣にし、みだりに驕りて、いさゝかのことに、争ひなどし、遂には、國家のみだるゝ本ともなるものなり。慎みて、この心を失ふべからず。

已より長ずる人は、敬ふこと、兄の如く、行住、坐臥、飲食にいたるまで、禮讓を以て、これに事ふ。これを、順といふ。學則利を、人に譲り、害を、已に受く。これを、讓といふ。

美を、人に推し、醜を、已に取る。これを、謙といふ。謙の反を。驕とし、讓の反を、争といふ。驕と、争とは、身を亡すはじめなり。言志彙錄徳は、遜讓より美なるはなし。美德は、仁者の行なり。不徳は、驕慢より惡なるはなし。惡徳は、不仁者の行なり。嬰鳴館遺草

第二十課

藤原良繩といふ人は、清和天皇の御代に仕へて、正四位下左大辨の官位に叙せられたり。時に、右大辨南淵年名、左中辨大江音人といふ二人は、この頃、才望、世に勝れたる人なりしか

ども、其の官位、ともに、良繩の下にあり。良繩、私に、人に語りて曰はく、年名、音人の二人は、碩儒耆宿にして、また、朝廷の元老なり。然るに、吾は、少くして、斑位、其の上により、平常、出入進退ごとに、顔に汗せざることをなし。又、左近衛少將藤原基經は、少くして、風骨あり、才望、甚、たかく、世、みな、非常の人なりといひ、先帝も、また、其の雅量を、れもむじ、もども、親寵し給へりし程なるに、今、ともに、四位に在るは、はなはだ、心安からず。前賢の教へられたる言にも、れよる、少將、四位を、れぶるものあれば、中將、職を辭す

といふことあり。吾、古人の行なしといへども、私に、これを慕へり。久しく、高き官位に在りて、賢人の進むべき路をふさぐは、我が志にあらずとて、切に辭讓して、あへて、其の官事に當らざることを久しかりき、よりて、年名は、左大辨となり、音人は、右大辨となり、基經は、中將となり、れのく、其の官を進められ、良繩は、右衛門督に遷りぬ、されば、その頃の人、みな、良繩の、禮讓をまもることの厚きを、賛稱せざるはなかりきとす。

第九 立志

第二十一課

人、其の志を立つること、堅固にして、動かざれば、期する事、いかに、遠大なりとも、遂に、達することを得ずといふことなし。もし、又、志、堅固ならずして、時々に移りかはるときは、いかに、企つる事ありとも、必、成ることなきものなり。故に、何事にても、成さむと思はぶ、まづ、志を立つること、堅固にして、動かざることをつとむべきなり。

志は、萬事の基なり。志立たば、精心純一にして、天地をうごかし、鬼神を感ぜしめ、金石をもつらぬくべし。志は、大將なり。耳目鼻口は、士卒なり。志、誠に立たば、耳目鼻口の慾、みな、退き去らむ。安積信

飛彈たくみほめてつくれる眞木柱マキバシ

たてしこゝろは動かざらまし加茂真淵

第二十二課

細川忠利は、忠興の子なり。忠興、嘗ていひけるは、男子、年十五、はじめて、丈夫と稱す。汝、已に、十五にれよびぬ、丈夫とは、いかなるものなることを知れるか。忠利、丈夫は、死にて、厲鬼とならずと答ふ。また問ふ。將とならばいかに。忠

利曰はく、士卒の先をなさむと。又問ふ。國守と
ならはいかに、忠利曰はく、民の衣食住を足ら
しめむと。忠興きゝて、大に喜び、汝、常につゝし
みて、必、今の言をわするゝこと勿れと、訓へけ
り。その後、忠利、家をつぎて後、肥後國を領し、熊
本に居り、前守加藤清正の遺業をうけて、役を
課し、水を治め、農をすゝめ、田をひらき、又多
くの名士を招きて、祿を與へぬ。ゆゑに、島原の賊
を討つにたよび、士卒、諸藩にさきだちて、勇戦
せり。さて、忠利は、身を終ふるまで、公正直亮に
して、其のなしゝ事、少しも、十五歳の時の言に

たがはざりきとす。

後藤松軒は、三河國の人なり。幼少の時に、明を
失ひしかば、師につきて、瞽者の業をまなびぬ。
松軒、一日、憤然として曰はく、瞽者の業は、卑汚
のみ。音曲を以て、人に寵遇せらるゝは、たとへ
ば、鳥の、好音あるが故に、籠中に畜るゝが如し。
人として、恥づべき業なりと。つひに、其の師に
こひて、瞽者の業をやめ、これより、意を、學問に、
ひるめ、人に、書を讀ましめて、これを聽き、遂に、
名高き儒者となれり。されば、諸方より、禮をあ
つくして迎ふるもの、甚れほく、諸侯にして、之



を聘するものさへありきとす。

第十 忍耐

第二十三課

人、一たび、事に志しては、いかなる艱苦に出遇ふとも、屈せず、撓まず、たゞ、一念に、之をつとめはげみて、瑣細なる他人の毀譽などには、かゝはるべきにあらざるなり。高き山に登るには、必、けはしき路を経るが如く、志の成就するまでには、必、種々の艱苦に出遇ふこと、思ふべし。すべて、古より、大業をなしたる人は、誰も、みな、非常なる艱難を嘗めたる人にあらざるは

なきなり。

末つひに海となるべきやまみづも

あはし木の葉の下くぐるなり開田詠草

諸の事を思ひあのはむは、勝れたる徳なるべし。人の心中に、諸の悪しき事を思ふ。これを忍はざるは、あさましかるべし。人の身の上に、さまたまの苦あり。これを忍はざるは、世に立ちめぐるべからず。中にも、年わかき輩は、飢を忍びて、道を學び、寒を忍びて、君に仕へつゝ、家をつたこし、身を立つる計をすべきなれば、かたく、物に堪へ忍ぶべきなり。十訓抄

第二十四課

名取彦兵衛は、甲斐國山梨郡の人なり。明治初年の頃、本邦の生絲は、たほくの人力を費せども、なほ、精良ならざるもの多く、ために、聲價をたとし、蠶業の損失を招くこと、少からざるにいたれり。彦兵衛、これを歎き、從來の家業を廢して、さらに、製絲の器械を改良せむと志し、刻苦勉勵して、はじめ、一の器械を創造し、之を試みしが、その製造、いまだ、完全ならずして、むなしく、資本を失へるのみなり。然れども、彦兵衛、すこしも屈する色なく、ふたゝび、心をこら

して、改め作りしも、なほ、精密なるに至らず。かへりて、その改作する毎に、損失を來すのみにして、ほとんど、家産を蕩盡せり。近隣のもの、は、之を見て、痴とよび、狂とろしり、その迂拙を笑はざるものなかりき。こゝに於いて、親族のもの、かはるぐ、彦兵衛を諫めて、もとの職業に復せむことを勧めけれども、いさゝかも聽かず、ますます、その志を堅くして、器械製作の法を研究し居たりしかば、親戚、朋友も、みな、其の諫を用ゐざるをいきどほり、終に、交際を絶つにいたりぬ。されども、彦兵衛、敢て、これを、意と

せず。ひとり工夫をこらし、遂に、蒸氣力によりて、製絲をかわかすことを發明し、大に、工費をはぶき、絲質も、また、精良ならしむることを得たり。乃、其の製絲を輸出せしに、大に、賞賛をえて、絲價、前日に倍するにいたれり。これより、彦兵衛、力を得て、製絲に、光澤を加ふる法をかんがへ、ますます、精好をきはめて、大に、我が國産を發達せしめたり。されば、官、其の國益のために、力をつくし、志をよみし、あつく、之を賞せられたり。

第十一 勤勉

第二十五課

勤勉は、業を成し、功を奏する基なり。人、いかに、志望ありとも、勤勉するにあらざれば、決して、何事も成すこと能はざるものなり。光陰の過ぎゆくことは、矢よりも早く、とかくする間に、大切なる時期をすぐし、つひに、己の本分をも、つくし得ずして、一生を終ふるもの、はなはだ少からず。誠に、口惜しきことなり。また、いかなることにてても、勤めて怠らざるときは、成らずといふことなし。己の成らざるは、勤勉することの、いまだ、足らざる故なりと思ふべし。

年々に、花は、相似たれども、年々に、人は同じからず。老かさなれば、一とせの内にも、やうやく、おどろへゆきて、今の昔にあかず、後の、今にあかざる事をゑりて、かねてより、悔なからん事をおもひ、時日ををしみ、一日も、いたづらに、すぐすべからず。今日くれて、明日もありとて、たのむべからず。けふの日の内を、日々にをしむべし。樂訓

人、よく、一層の勞にたふる者は、よく、一層の樂を受く。百層、千層の勞にたふる者は、よく、百層、千層の樂を受く。其の困む所は、其の樂む所の

地なり。栗山文集

第二十六課

人、其の職務をつとめて怠らざるは、最、大切なることなり。いかに、才學藝能ありとも、常に、怠惰なるときは、その分を全うすること能はざるものなり。いつにても我が力のあるかぎりを盡して、ひたすらに、其の職分を全うせんことを心かくべし。いたづらに、時日を費すは、天道のどがめ、畏るべきことなり。

竹のねの下はひわたるふしの間も

けふの日影をあだにくらすなうけらが花

藤原在衡は、村上天皇の御代に仕へて、左大臣に至りぬ。在衡、職にありて、よく、勤勉し、一日も、朝参をかきしことなし。ある日、にはかに、天くもり、暴風吹き来り、雨、はげしく降りて、人の往來もやみぬる程なりしかば、御所の衛士等、相語りて曰はく、いかに、勤勉なる藤左大臣なりとも、此の風雨には、よも、参朝せられざるべしと。其の言葉、未、をはらざるに、在衡、簑笠を着て、参朝したりしとぞ。また、在衡、参朝する毎に、つねに、車中にて、文書を読み、御奉仕の心掛、すこしも怠なかりき。かくの如く

なりければ、時の人、在衡の、其の職に勉勵なるを、歎稱せざるはなかりき。

第十二 誠實

第二十七課

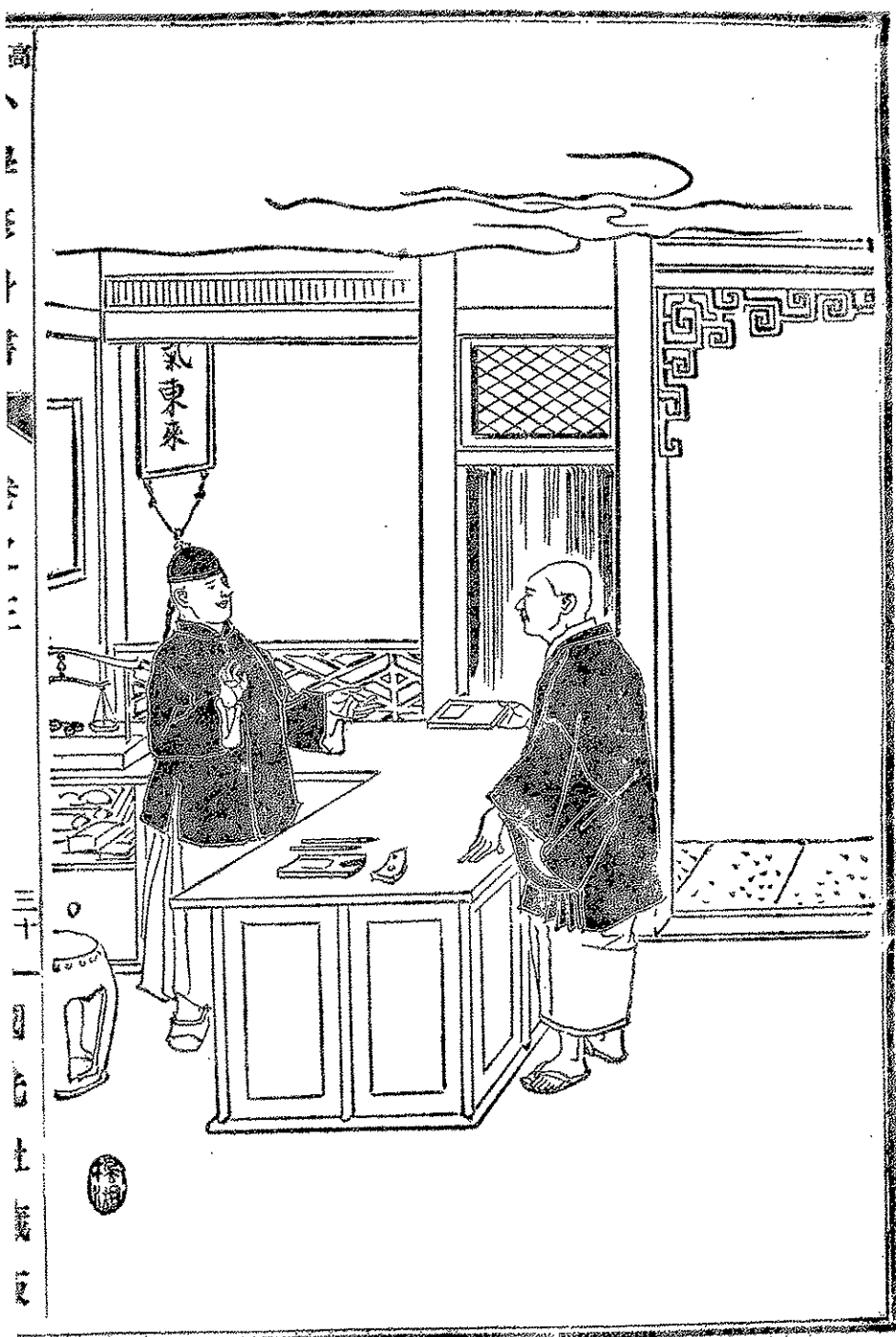
誠實とは、詐らず、侮らず、一言一行も、我が心にかへりみて、やましきことなきをいふなり。何事をなすにも、かならず、誠實を本とすべし。もし、誠實の心なきときは、其の言行、みな、詐偽虚妄となり、人に、信を失ひ、世に容れられざるに至るべし。されば、誠實ならざるものは、才智ありとも、恃むに足らざるなり。

日用、一言を發するにも、黒きを黒しとし、白きを白しとして、偽らず、信をたて、約をたがへざるを肝要とす。信は、萬善の本源なり。偽は、萬惡の元基なり。虚言をいはずと決定するは、人道の自然なり。かりるめにも、不實なからむことを思ふべし。心的三綱

禍福は、天にあるにあらず、人の招く所による。人、心を正しくし、意を、誠にすれば、天、かならず、福を降す。慾をほしいままにし、奢をきはめば、天、かならず、禍を降さむ。明徴錄

第二十八課

寛永の頃、長崎に、布屋了心といふものありて、支那より、舶來する沈香をあきなふを業とせり。ある年、清商の來れる時、了心、例の如く、沈香一籠を買ひ、持ちかへりて、開き見しに、沈香の中に、伽羅の木まじり居たり。了心、うち驚き、急に、清商のもとにいたりて、之を返しければ、清商、大によろこび、いたく感歎して、これ、實に、眞の賢人なりとて、たふとび敬ひけり、かゝる誠實の行ありしを以て、清商も、甚、たのもしく思ひ、了心の家を以て、入津せし船の旅館とせむとて、奉行に願ひいでしかば、やがて、奉



了心を召し、船主の願にあたがひて、汝の家を、旅館とすることを許すべしと命じたり。此の頃の慣例として、長崎に來る支那船は、みな、其の因にあたがひ、一の商家を借りて、旅館とし、船載の物品は、ことごとく、其の商家にゆだねて、自由に販賣せしめけり。これによりて、商家は、莫大の利を得、忽にして、富裕となるものあり。されば、人々、あらそひて、その旅館たらむことを望むほごなるに、獨、了心は然らず、奉行に答へて曰ひけるやう、吾、もとより、獨身なれば、沈香を商ふのみを以て、衣食足り、心、また安し。

又、婢、一僕ありて、我が身體の勞をたすけ、家内、常に、寧靜なるに、何ぞ、異國の客を宿して、繁劇の苦を求むべきと。固辭して、遂に、うけざりきといふ。

第十三 公平

第二十九課

公平とは、事物を處理するに、私なく、偏せざるをいふ。人、公平なれば、天下を率ゐて、従はざるものなく、萬事を裁して、服せざるものなし。たとへば、鏡に向ひて、美醜を争ふものなく、衡に對して、輕重を論ずるものなきが如し。何と

なれば、其の寫す所、其の示すところ、公平無私なればなり。いやしくも、公平ならざる時は、大なるは、國を亂し、小なるは、怨を招くに至る。これより、人の行、公平正直なるものは、善行なり。これによりて、神に仕ふべし。これを持みて、神をあなごるべからず。これを用ゐて、人に事ふべし。これを持みて、人にをこるべからず。梧坡教諭善も、誇る心あれば、不善となる。人にほごこすも、徳とする意あれば、仁にとほし。諸徳、みな然り。祿利のために、忠勤をなし、名望のために、孝悌をなす。みな、此の類なり。人の行、公平正直

は、美事なれども、これを挟みて、人にさかひ、物に傲れば、公平にかけたる處あり。梧坡教諭

第三十課

藤堂高虎は、豊臣秀吉の臣なり。朝鮮征伐のとき、高虎、加藤嘉明等と、舟師を督して、大に、朝鮮の水軍をやぶれり。時に、高虎と、嘉明との間に、あらうひ事ありしが、諸將の和解により、大事に至らずしてやみぬ。されども、これより、二人の間、常に睦しからずして、つひに、交を絶つにいたれり。その後、徳川氏、將軍となるにねよびて、二人、また、之に仕へしが、將軍家光のこ

き、高虎を、會津の城主になさんとの沙汰ありしに、高虎、辭して曰はく、會津は、北門の鎖鑰にして、關東樞要の地なり。よろしく、材幹武畧あるものをあげて、之をあづめしめらるべし。吾、いま、年老いて、よく、其の任に堪へずと。家光、然らば、卿の見るところにては、何人が其の任にあたるべきかと問ひけるに、高虎こたへて、吾が見る所にては、加藤嘉明、最、よく、其の任に適せむ。彼に於いては、四十萬石の祿、決して、多からじと答へけり。家光、吾、平素、卿の、嘉明と、不和なるを聞けり。あかるに、今、これを推舉するは、何の

故ぞと、かさねて問ひければ、高虎答へて、吾と、嘉明との不和は、これ、私事なり。私事を以て、公事を廢するは、吾が本意にあらずといひね。家光、大に、其の公平なるを感賞し、乃、嘉明を、會津に封じ、つぶさに、高虎が推薦のむねを告げしに、嘉明、大に、高虎の義心に感じ、釋然として、舊怨をとき、さらに、水魚の交をむすびたりとす。

第十四 寛容

第三十一課

寛容とは、吾が心を寛濶にして、人に對し、事を處するをいふ。人は、其の面のことなるが如く、

業とせしが、仁齋にいたり、はじめて、儒學ををさめ、勤勉刻苦して、遂に、大儒となれり。仁齋、性質、はなはだ溫和にして、人と争ふことなし。その頃、大高坂清助といふもの、適從録といふ書をあらはして、仁齋の説を駁せしかば、門人、其の書を持ちきたり、仁齋に示して、之が辨を作らむことを勧めしに、仁齋、わらひて應ぜず。門人曰はく、人、書を著して、ほしきままに、我を非議せるに、いやしくも、我が辨ふさがらずは、豈黙して止むべけんや。先生、もし、答へ給はずは、吾、かはりて、これを辨ずべしと。仁齋曰はく、君

子は、人と争はず。若、彼の説、果して、是にして、我が説、果して、非ならば、彼は、我が益友たり。若、我、是にして、彼、非ならば、他日、彼の學力、長進するるとき、彼、みづから、其の罪を知らむ。れよる、學問するものは、たゞ、心を虚しくし、氣を平にし、人の説を聞きて、己の爲にすることを務むべし。何ぞ、彼をろしり、我を立て、いたづらに、辨を弄はむや。汝等、よろしく、深く戒むべしとて、すこしも、心に掛けざりき。當時、公卿に、學を好むもの多く、時々、京師の諸名儒をあつめて、討論せしめしが、諸儒、皆、はじめは、聲をやはらげ、氣

を下して、辨論すれども、其の説、反對して、相容れざるにれよびては、色を作し、聲をあらくして激論せり。然るに、仁齋、ひとり、心を平にして、溫厚なること、終始一の如くなりしかば、人々、皆、之に服せざるものなかりきとす。

第十五 租税

第三十四課

租は、土地の收穫より、その幾分を納め、税は、農工商の營業、れよび、貿易、その他、すべての所得などより、その若干を納むるものなり。人民の上納する租税は、皇室の尊嚴を擁護しまつ

り、百般の政務を施行する用に充て、國家の光榮を増進せむがため、兵備をなし、防衛を完くするなどの費に用ゐらるゝものなり。されば、我等は、れのくゝその職業を勉めはげみて、ますます、多くの租税を納むるやうなさんことを怠るべからず。租税を、多く納むるは、人民たるものゝ、もとも、大なる名譽なり。

おほやけには、天下泰平ならしめむとて、さまざまに、心をせめ、事を執り行ひたまふがゆゑに、其の費用たびたゞしければ、それを思ひて、民家のもの、かならず、年貢を減ぜむなどゝ、惡

しき謀をれこすは、勿體なき事なり。されば、力をつくして、乃貢を、缺怠なく納むること、民家の大積善にて、其の報は、己が身、親族、子孫におよぶと知るべし。積徳叢談

第三十五課

昔、伊勢國員辨郡に、與三兵衛といふ農民あり、其の家族、はなはだ多く、至りて貧しかりけれども、年貢を上納するときは、つねに、富めるものにさきだちて、之を納め、一度も、其の期日ですぐして、官の督促を受けしことなかりき。其の村の名主、之を、奇特のことに思ひ、與三兵衛

にむかひて、我、疾くより、汝の家の貧しきことを知れり。然るに、數年の間、曾て、年貢上納の期をあやまりたることなきは、實に、感ずるに餘ありといふべし。されば、奉行に於いても、大に、汝の心掛を歎賞せられたりといへり。與三兵衛答へけるやう、我等人民が、今日、かくの如く、安樂に、家業をいとなみ、父母妻子をやしなひて、此の土に安むずることを得るは、みな、領主の御惠なり。其の上、君は、なほ、親の如く、民は、なほ、子のごとし。子として、親を養ふは、當然の道なり。然るを、民として、食を、君に獻ぜず

は、不忠、これより甚しきものなからむ。この故に、我は、秋にいたりて、穀物を收穫するときは、第一に、年貢とすべきものを定めて、まづ、上納の準備をなし、故に、今まで、其の期を誤りしことなきなりといひしかば、聞くもの、ますます感じたりとす。

第十六 剛勇

第三十六課

剛勇とは、義にのぞみ、事にあたりて奮進し、威武に屈せず、富貴にうはれざるをいふ。正邪曲直をまかへりみず、身命をなげうちて勇進

するは、猪勇とて、大にいやしむべきことなり。つねには、溫厚柔和にして、兒子も、膝の上にはぶれ、一度怒れば、千軍萬卒も、色を失ふ。これを、眞の剛勇といふ。故に、人は、心の小にして、膽の大ならむことを要す。心、小なれば、翼々として、萬事をつゝし、み、膽、大なれば、大事に臨みてたゞれず、義理のある所にあたがひて、勇進することを得。これに反して、いたづらに、小事に進む人は、膽の小なるが故に、大事にあたりて恐懼し、つひに、剛勇の人となること能はざるなり。

剛を以て、人を服するは、仁愛の、人にいること深きに如かざるなり。仁愛、内にするなはれば、德馨、外に發す。其の人を薰することの大なる、ことに、爐香の芳郁のみならむや 錦里文集

第三十七課

濱田彌兵衛は、長崎の人なり。あはぐ、商船に乗りて、海外諸國にあるび、南洋諸蠻の語に通じたり。寛永のころ、末次平藏の商船、印度に通はむとして、臺灣の海をすぐるとき、紅毛人のために、貨物をうば、れ、辛くして、遁れかへれり。平藏、大に怒り、これ、ひとり、我が恥のみなら

ず、實に、御國をはづかしめたるなり。報いずして止むべけむやとて、彌兵衛にはかりぬ、彌兵衛、慨然として、これに應じ、即、其の弟小左衛門、子新藏、其の他百餘人、ことごとく、農夫によるはしめて、臺灣にわたり、移住の民と稱し、甲比丹に見は、留住を許さむことを請ふ。數月をふるも、許さざりしかば、彌兵衛等、みな、大にいきどほり、拂曉、城門を押し開きて、攻め寄せたり。時に、甲比丹、なほ、寝ねて、牀にありしが、彌兵衛、進みいり、其の胸をとらへ、短刀を、喉に擬して、さきに、我が商船をかすめたることを責

む。紅毛人等、驚きさわぎ、これを救はむとて、集り来るを、小左衛門新藏等、刀をひらめかし、目をいからして叱責しければ、あへて、迫り得ず。甲比丹、たゞ哀を請ふこと、しきりなり。彌兵衛、即、城上の放礮をやめ、彼等がかすめたりし貨物の數を、倍して贖ふべしといひければ、甲比丹、たゞ、命のまゝに従はむといふ。よりて、其の臂をとらへ、小左衛門、新藏、その前後をまもりて出でしに、甲比丹、命を傳へて、放礮をとめ、卒をして、蠻船一隻、および、日本船二隻に、貨物を積み満てしめたり。彌兵衛入りて、之

を檢し、やがて、甲比丹をも伴はむとせしかば、甲比丹曰はく、島民、皆、わが指揮をあふげり。今、われ去らば、島民、依る所なからむ。われに、一兒あり。ねがはくは、之をして、代らしめよと歎き請ふまゝに、其の兒と、他の紅毛人とを、質として、拉へかへりぬ。このれもむき、代官より、幕府に白しければ、あつく、其の功勞を賞せられたり。これより、彌兵衛の名、海外にふるひぬ。

第十七 護國

第三十八課

皇孫、神勅を奉じ、武を以て、此の大八洲を肇

めさせ給ひしより、世々の列聖、みな、武を尙はせ給ひければ、臣民も、よく、御訓を守りて、一般に、勇武の氣象に富み、義に勇み、奉公のためには、家をも、身をもかへりみずして、たれ一人、私のために、國を忘るゝが如きものあらず。古來、世界に比なき御國の光の、たえず、かゝやけるは、專、この氣象のあるによれるなり。現今、交通の途、大に開け、世界萬國、みな、比隣となれることなれば、臣民たるもの、ますく、心を一にし、勇武の氣象を振ひたこして、忠勤をはげみ、我が國の、いよく、強盛になりて、世界の光華

となるやう勉めざるべからず。また、國を護るは、たゞに、軍人たるもの、務のみならず。御國に、生をうけたるものは、一人も残らず、みな、兵士たる心掛なかるべからざるなり。

細戈の餘光、外國にかゝやき、かりるめにも、國體をはづかしめざる事も、神聖の君の、世々、武術をふるひ給ひし餘烈なるべし。迦彝篇

虎吼ゆる國のさかひものゝふの

まもるかぎりは安けかりけり小野古道家集

第三十九課

藤原隆家、太宰權帥となりしが、管内の施政、よ

ろしきを得て、數年を経ざるに、九州の士民、みな、其の徳になづけり。後一條天皇の御時、刀夷の賊、戦艦五十餘艘をひきゐ、まづ、高麗に寇し、ついで、我が對馬、れよび、壹岐をれるひ、士民を殺し、すゝみて、筑前にいたり、志摩、早良の二郡を侵し、財物をうばひ、人家を焼きて、男女四五百人を虜にし、勢はなはだ、猖獗をきはめたり。かくの如く、事、不意にれこりしを以て、朝廷の裁許を乞ひ、兵士をあつめ、軍艦をるなふる暇なし。然れども、隆家は、すこしも驚かずして、みづから、戰略を畫し、部將を指揮し、まづ、警

固所を守らしめければ、賊、轉じて、能古島を占領し、博多にせまりて、警固所を焼かむとせり。前少監大藏種材等、奮戦して、よく、之を防ぎしにより、賊、志を得ずして、能古島にかへり、更に、宮崎をれるはむとせしも、風波あらくして、二日を経たり。隆家、乃、沿岸の守備を嚴にし、戦艦を修補し、少貳平致行、れよび、種材等に命じて、三十餘艘を以て、進撃せしむ。財部弘延等、率先してたゝかひ、つひに、能古島を復す。賊、これを、外洋に避け、肥前國松浦郡を侵し、も、前肥前介源知、よく、これを防ぎ、かつ、急を、太宰府につ

げぬ。隆家、乃、水兵を増發して、れもむき援けしめ、大に、これを破りしかば、賊、つひに、力つき、わづかに、俘虜を載せて、のがれ歸れり。亂たひらぎ、隆家、つぶさに、狀を、朝廷に奏したり。

第四十課

島津齊彬は、薩摩の藩主にして、忠愛の志あつき人なりき。當時、幕府、政を擅にして、皇室を奉戴することを怠りしかば、齊彬、大に、之をうれへ、苦心焦慮して、大義を明にし、名分を正さむことを力めたり。嘉永六年、皇居、炎上の災ありしも、幕府、海防警備のため、儉約をなすと

稱し、常の供御の御料をさへ、減じ奉ることありしかば、齊彬、これを歎き、金數千兩を獻納し、かつ、幕府の非禮を責め、大に、其の注意をうながせり。又、御護刀二口、ねよび、古笙一管、小簞笥一個を獻ぜしに、歡感淺からず、ひるかに、禁闕の守護をねほせ付けさせ給ひ、種々の物品、および、密旨をさへ賜りぬ。安政四年、就國の途次、伏見の邸より、微服して、洛中に入り、皇居を拜觀し、南門の前にいたれるとき、小雨の降りしにもかゝらず、陣笠を脱ぎ、地上にひざまづきて、うやくしく、拜禮をなし、是はら

く、意念をこらし、一志は、忠勤をはげまむことを誓ひたりとす。かくて、仙洞御所をも拜觀し、いよく、勤王の軍備をなさむがために、櫻木町の邸に入り、岡崎邊に、一邸地を相したり。また、當時、外艦、あきりに、邊海をうかぶひ、海内、こずりて、周章狼狽し、わづかに、軍備を戒飭する有様なりしに、齊彬は、つとに、海外の事物に通じ、彼の長を取り、我が短をれぎなひ、世に先むじて、砲を鑄、艦を造り、大に、兵勢を張り、海防の策を講じ、邊海をいましめたり。而して、安政五年正月、一門によび、諸吏を會し、前年たまはり

し、御製、れよび、御宸翰を拜覽せしめて、士氣を振起し、爾來、兵甲を練り、武備ををさめ、勤王護國の用意、をさく、怠らざりしが、七月に至りて、病にかゝり、志を果さずして薨ぜり。弟久光、遺命を受けて、後事を措置し、天下に率先して、力を、王事につくし、心を、海防にくださしかば、遂に、明治維新の大業成りて、國威は、ますます耀くにいたれり。

高等小學修身書卷之三終

定價金拾錢

明治二十五年九月二十五日印刷
明治二十六年十月三日發行
明治廿六年十二月卅一日訂正再版印刷
明治二十七年一月七日訂正再版發行
九月十五日校訂三版印刷
九月十八日校訂三版發行

審者 伯爵 東久世通禧

東京市麻布區本村町百八番地

西澤之助

東京市京橋區築地二丁目一番地

國光社圖書部

東京市京橋區築地二丁目一番地

版權所有

發行兼印刷者 發兌



a1380329072a
福岡教育大学蔵書